No.168 乳腺相似分泌癌：ＭＡＳＣ　　熊本赤十字病院　境　一

① 60 歳代。男性

② 既往歴：特になし

③ 臨床経過：健康診断で左頚部の腫瘤を指摘されて来院。エコー検査で左顎下腺尾部に突出する腫瘤を認めた。石灰化を伴っており、悪性が疑われた。

④ 検体、材料：左顎下腺穿刺

⑤ 細胞診所見：パパニコロウ染色では、異型細胞が豊富に採取されており、腫瘍細胞は緩やかな結合性を示し、大小の集塊から孤在性にみられる。背景には少量の粘液がみられる。異型細胞は比較的均一で、豊富な顆粒状の細胞質を有し、N/C 比は低く、細胞質に大小の多彩な空胞変性を認める。核は円形で、大小不同はなく、核内細胞質封入体が散見される。クロマチンは微細顆粒状に軽度増量し、小型核小体が散見される。メイ・ギムザ染色では紅紫色の粘液を背景に異型細胞が小集塊から孤在性出現し、細胞質は好塩基性を示し、一部の細胞には比較的大きな顆粒を認めた。

⑥ 組織所見：摘出された耳下腺内には最大径 1.8cm の腫瘤性病変が認められた。腫瘍細胞は豊富な淡好酸性細胞質、円形から類円形の比較的均一な核、小型の核小体を有していた。充実性から敷石状の配列ともに alcian blue 染色陽性を示す粘液産生を伴う腺管構造が散見された。免疫組織化学染色で以下のような染色態度を示した。

陽性：CK7、EMA、S100、mammaglobulin

陰性：CK5/6、p40、p63

腫瘍細胞は周囲骨格筋への浸潤は認められませんが、隣接する唾液腺内に神経周囲浸潤を伴って浸潤していた。

以上の所見から組織型は乳腺相似分泌癌：mammary analogue secretory carcinoma; MASC と考えた。

⑦ 鑑別点：ワルチン腫瘍とは背景のリンパ球の出現状態と細胞質が好酸性化していない点で鑑別できる。多形腺腫は筋上皮細胞と腺管上皮細胞の混合腫瘍であることと、ギムザ染色で異染性を示す間質粘液の存在で鑑別できる。基底細胞腺腫は N/C 比の高い腫瘍細胞が重積性のある集塊で出現し、ギムザ染色では集塊周囲に異染性を示す基底膜様物質が少量みられる点で鑑別ができる。オンコサイトーマは好酸性の顆粒状細胞質を有すが、粘液はみられない。腺房細胞癌は腺房様配列を示す集塊でみられ、好酸性顆粒状細胞質はチモーゲン顆粒でギムザ染色みられる。粘液は産生しない。甲状腺乳頭癌は腫瘍の結合性は強く、N/C 比は高く、細胞質は淡明で、顆粒はない。核溝を認め、微細顆粒状のクロマチン増量がみられる。

参考文献：唾液腺腫瘍アトラス、

細胞診ガイドライン　No４消化器、